七夕に想う２

渡島医師会
望ヶ丘医院
田中慈雄（たなかやすお）

この寄稿が出るころには終わっているが、７月７日は七夕の日である。函館では、この日、子供たちがお菓子をもらいに夕方ごろから街に出る。ササ飾りを飾っている家の前で「たけーにたんざくたなばたまつり、おおいにいわおう、ろうそくいっぽんちょうだいな」と歌ってお菓子をもらうのだ。私も50年前は現役の子供だったので、おおいにこの歌を歌った。よく聞くと、私の頃とは歌の節が若干違う。たなばたまつり、の「な」の部分で１音上がるのだ。院内の職員にこの歌を歌ってもらうと、当年50歳と48歳の人の間でこの変化があった。49歳の該当者がおらず、これ以上の調査は打ち切りとなったが、１音上げて歌うと何となく明るい感じがする。歌詞も私ら当時の子供たちは、おおいにいわおう、なんて歌ってはおらず、おーいやいやよ、と歌っていた。こどもにおおいにいわおう、なんて言われてもなんか偉そうな感じがして、あまり好意はわかないかも。おーいやいやよ、の方がかわいい感じがするけど、かわいいだけじゃだめですか。

昨年から子供たちにお菓子を配る方に参加した。昨年はあっという間に用意したお菓子がなくなってしまった。今年は昨年の倍以上のお菓子を用意し万全の備えをした。昨年との違いは、今年は引っ越しをして、所属している町が変わった、が、そんなことは些細なこと、さあ来い子供たち。

こども、来ない。少子化の波が押し寄せてきたのか、昨年はにぎわったのに。町が変わったっていったって、隣町に引っ越しただけなのになぜ？　外に出る、あたりを見る、耳を澄ます。たしかに子供たちの歌声が聞こえる。子供はいるのだ。しかし私の家の通りには子供がいない。もう少し待っていると来るかな。待つ、来ない。外へ出る。ほうきとちり取りを持って、玄関先、前の道路をほうきで掃く。掃きながら子供が来ないかどうかみる。かなりの時間をかけてほうきをふるったがこどもがいない。いちど家に入る。待つ。まだ来ない。２度目のほうきおじさん出動。道はきれいなもので小石一つ落ちてない。こども、来ない。ほうきおじさん３度目出動しかかったところで妻より、３度目は不審人物と思われるので止めるように言われそれに従う。そうだ、ドアホンを新しくしたら、カメラがついていて、ドアホンのモニターに外が映るのだ。それを凝視する。緊張に満ちた沈黙の時間が流れ、それを打ち破る絶叫、「浴衣の子発見、距離50、外出ます」。妻は冷静にそれを制止し「まだまだ、もう少し引き付けてから」。距離30、20、10、「たけーにたんざくたなばたまつり、おおいにいわおう、ろうそくいっぽんちょうだいな」。間違いない、来た。こちらもこの町でのデビューだ。自分はどんな顔しているかな、鼻毛出てないよな、髪の毛乱れてないかな。「いらっしゃい、こんばんは」、そこにいたのは、浴衣を着たかわいらしい女の子。天使にも等しいその存在。お菓子をあげる、「ありがとう」天使は去っていく。これだ、この瞬間のために１年待ったのだ。さあ、これからだ。天使の行列カモン。しかし、刻一刻と時は流れ、終了時刻を迎えた。なんと、一組。今年は一組だった。大量のお菓子が残った。なぜ、なぜこのような仕儀に至ったか。

ほうきおじさんをやってみて気づいたのだが、私の家の通りは、ササ飾りを飾っている家が２軒しかないのだ。七夕まつりに参加する、すなわちお菓子を配る家はササ飾りを飾ることになっていて、それが２件しかないのだ。その２軒はうちとお隣さん。家の前の通りは約250m、そこに２軒しかなくそれも隣り合ってて固まっている。たしかに少子化で子供は少なくなったのだろうが、子供だって大人に対する慈善事業で周っているわけではないのだろうから、効率の良いお菓子集めを考えると、参加する家が少ないところより多いところを選ぶ、私だってそうする。この状況を改善するには、参加する家を増やす必要がある。私たちも引っ越してきたばかりで、この通りにはどのような人たちがいるのかまだ分かってないのだが、同業者の〇〇病院の□□先生とか△△クリニックの××先生とか３家はある。まずはここらあたりから参加してもらうよう画策してみるか。大量に残ったお菓子を食べながら、来年に向けて深慮遠謀をめぐらせよう。